

(実践報告)

基礎看護学実習 I (学内実習) における学びと成果

清水八恵子¹⁾ 森本直樹¹⁾ 佐藤章伍¹⁾ 水越秋峰¹⁾ 神谷美香¹⁾ 須賀京子¹⁾

I. はじめに

看護学教育において、臨地実習は看護実践能力の基礎を学ぶ重要な科目である。看護学教育の在り方に関する検討会(2017)は、臨地実習の意義について「看護の臨地実習は、看護職者が行う実践の中に学生が身を置き、看護職者の立場でケアを行うことである。この学習過程では、学内で学んだ知識・技術・態度の統合を図りつつ、看護方法を習得する。学生は、対象者に向けて看護行為を行い、その過程で、学内で学んだものを自ら実地に検証し、より一層理解を深める。言い換えると、看護の方法について、『知る』『わかる』段階から『使う』『実践できる』段階に到達させるために臨地実習は不可欠な過程である。」と述べている。このように多様な実践の場で学修する臨地実習は、自己の学びをさらに深め、成長していく重要な学修場面であり、実践を学ぶ臨地実習には常に充実した教育環境や教育内容、教員および臨地実習指導者の指導力が求められる。

本学における専門科目「看護の基礎」に位置づけられる基礎看護学実習 I (看護の場と対象) は看護師を志す 1 年生にとって初めての病院実習である。実習目標などに多少の差異はあっても、ほとんどの大学や看護専門学校で行っている初めての基礎看護学実習の内容は「病院の機能を知る」「看護師の役割を知る」「療養環境を知る」「看護の対象である人を知る」「対象とのコミュニケーションを図る」「指導のもと、実際に一部の看護技術を実施できる」等を含んでいる。

本学では、前学期に基礎看護学概論、看護コミュニケーション、看護技術論 I を履修した学生が実践の場である病院においてその機能や看護師の役割、そして対象となる患者とのかかわりや療養環境を実際目で見て学ぶ。このように基礎看護学実習 I は、今後の学修の動機付けとなる重要な位置づけを示す実習である。しかし 2020 年度は新型コロナウイルスによる影響から、臨地実習の受け入れ中止が相次ぎ、基礎看護学実習 I も学内実習への変更を余儀なくされた。学生は、基礎看護学実習 I までに履修する授業が遠隔授業となり、仲間との関わりもないまま予測できない日々の状況の変化に戸惑い、精神的にも苦痛を感じながらの学修環境であったと推察する。そのような状況下において基礎看護学講座では、コミュニケーション能力の育成、日常生活援助の実施や療養環境の把握など、学内実習と臨地実習の乖離を極めて最小にし、可能な限り高い学修効果を目指して基礎看護学実習 I を構成した。そこで、今年度初めて学内実習で実施した基礎看護学実習 I の内容および学びの成果を報告する。

II. 学内実習の構築

1. 実習目的

看護の対象となる者の人的・物的医療環境や生活環境を理解し、コミュニケーションを通して対象者の背景や療養生活上の思いを知ること、対象者を生活者としてとらえる。また、看護活動の実際を体験することを通して、援助的人間関係のあり方や看護専門職としての役割、態度、責任を学ぶ。実習を通して今後の学修の動機づけとし、自己研鑽へとつなげる。

2. 実習目標

1) 対象者の療養生活環境について説明できる。

1) 朝日大学保健医療学部看護学科 (基礎看護学講座)

- 2) 対象者および実習関係者と適切なコミュニケーションを図ることができる。
- 3) 対象者とのコミュニケーションを通じて、対象者の思いを述べることができる。
- 4) 対象者の療養生活の実際を知り、生活援助の必要性を理解できる。
- 5) 看護活動の実際を知り、基本となる生活援助を体験することができる。
- 6) 体験した生活援助の根拠と妥当性、および効果について考察することができる。
- 7) 看護師の役割と責任について、考えたことを述べるができる。
- 8) 看護学を学ぶ者としての自己の学修課題を述べるができる。

3. 学内実習の構成

実践の場に身を置くことができない状況で、どのようにして病院の機能や構造、看護師の役割、コミュニケーションについて学ぶ環境を整えればよいかを講座内で検討を重ねた。2019年度の基礎看護学実習 I では、臨地においてバイタルサインの測定や日常生活援助の一部を実施したが、今年度の前学期は、演習を通して技術修得を目指す必要のある看護技術においても、対面授業のコマ数が制限されることによって、修得には至らなかった技術もあった。そのため、実施するのがほぼ初めての技術がある中での学内実習となった。そのような状況をふまえ、できる限り臨地実習と乖離のない実習目的・目標を到達すべく構成した学内実習の学修方法を表 1 に示す。学内実習は項目 I ～ V で、学修内容はコミュニケーションを活用したロールプレイング、模擬療養環境の考察、患者役看護師役としての看護技術の実践、模擬カンファレンスを取り入れた（表 2）。

表 1. 学内実習の構成と学修方法

実習目標	行動目標	学内実習の学習方法
1. 対象者の療養生活環境について説明できる。	<ol style="list-style-type: none"> 1) 病院・病棟の構造と機能を述べるができる。 2) 対象者の療養生活を支える各部門や職種を述べるができる。 3) 療養生活の人的・物的環境を述べるができる。 	項目 II（療養環境） ①オリエンテーションと病院・病棟内の案内を受け、情報や気づいたことや考えたことを書き留める。 ②オリエンテーションと病院・病棟内の案内を受け、対象者と各部門や他職種との関わりについて、気づいたことや考えたことを書き留める。 ③対象者の観察を通して、療養生活環境を理解する。
2. 対象者および実習関係者と適切なコミュニケーションを図ることができる。	<ol style="list-style-type: none"> 1) 自ら挨拶をすることができる。 2) コミュニケーションを図るための、周囲の環境を整えることができる。 3) 好感・信頼感を高めるコミュニケーション技術を身に付けることができる。 4) 適切な言葉遣いができる。 5) 効果的なカンファレンスを実施することができる。 	項目 I（コミュニケーション）2-1）～4） 項目 V（看護師の役割と責任）2-5） ①自ら挨拶と自己紹介をし、グループメンバーと積極的に関わることができる。 ②コミュニケーションがとりやすい環境を考えて整える。 ③言語的・非言語的コミュニケーションを意識して対象者と関わり、効果的なコミュニケーション方法について考察する。 ④状況に応じて適切な言葉遣い（尊敬語・謙譲語・丁寧語）を行う。 ⑤カンファレンスでの自身の役割を理解して、積極的に参加する。
3. 対象者とのコミュニケーションを通じて、対象者の思いを述べるができる。	<ol style="list-style-type: none"> 1) 相手が話しやすい雰囲気を作ることができる。 2) 対象者の話を傾聴する姿勢について考えることができる。 	項目 I（コミュニケーション） ①相手の話を引き出すように関わる。 ②否定的姿勢と傾聴の姿勢について、様々な立場から感じた点や気づいた点を話し合い、まとめる。
4. 対象者の療養生活の実際を知り、生活援助の必要性を理解できる。	<ol style="list-style-type: none"> 1) 対象者の現在の療養環境と生活状況を述べるができる。 2) 療養環境や生活に対する対象者の思いや、必要な援助について述べるができる。 3) 実施されている生活援助の対象者にとっての意味を考えることができる。 	項目 II（療養環境）4-1）・3） 項目 III（安楽な体位、バイタルサイン）4-2）・3） 項目 IV（日常生活援助） ①対象者の療養環境の特徴や入院中の生活の変化について、情報をまとめる。 ②体動制限がある状況を例として体験し、対象者に実施する必要がある援助（安全・安楽の援助）について考察する。 ③対象者に実施されている生活援助内容を観察しながら、援助が必要な理由について考える。

5. 看護活動の実際を知り、基本となる生活援助を体験することができる。	1) 療養生活における看護活動の内容を述べるができる。 2) 指導のもと、バイタルサインを測定できる。 3) 指導のもと、対象者に必要な生活援助を実施することができる。	項目Ⅲ (安楽な体位, バイタルサイン) 項目Ⅳ (日常生活援助) ①療養生活における看護活動の実際について考察する。 ②教員の指導を受けながらバイタルサイン (体温, 脈拍, 呼吸, 血圧) の測定を行う。 ③事前学習, 話し合いや指導内容をもとに, 安全・安楽に配慮しながら生活援助を実施する。 ④援助を受ける対象者の反応を観察する。
6. 体験した生活援助の根拠と妥当性, および効果について考察することができる。	1) 実施および考察した生活援助内容を振り返り, 療養生活を送る対象の生活援助の必要性についてまとめることができる。	項目Ⅲ (バイタルサイン) 項目Ⅳ (日常生活援助) ①生活援助を行う際に注意した点や工夫した/されていた点を考える。または学生同士で話し合う。 ②援助の実施前後の対象者の状態から, 援助の必要性と援助を実施したことによる効果をまとめる。
7. 看護師の役割と責任について, 考えたことを述べるができる。	1) 看護師の役割について述べるができる。 2) 看護師の責任について述べることができる。	項目Ⅴ (看護師の役割と責任) ①看護師の対象者への関わりを通して, 対象者の療養生活を支える看護師の役割について考える。 ②看護活動の実際を通して, 看護師の責任について考える。
8. 看護学を学ぶ者としての自己の学習課題を述べることができる。	1) 文献を使用して学習できる。 2) 疑問に思ったことを確かめることができる。 3) 学習内容をグループメンバー間で共有し, 学んだことを記述できる。 4) 自己の学習課題を明確にできる。	項目Ⅰ～Ⅴ ①体験した看護活動を, 教科書などの文献を使用して意味を確かめる。 ②実習中疑問に思ったことは, 調べたり質問したりすることで解決できるようにする。 ③日々の振り返りや話し合いを通して学びを共有し, まとめる。 ④今後の学習に向けて自己の学習課題を明確にする。

表2. 実習項目と内容

実習項目	内 容
I : コミュニケーション	コミュニケーション技術を活用しながらロールプレイングを通して専門職として適したコミュニケーションの取り方を考察する。
II : 療養環境	病院および病棟の模擬オリエンテーションと, 病室を再現した模擬療養環境を用いて療養環境と生活援助の必要性について考察する。
III : 看護技術① (安楽な体位, バイタルサイン)	体動制限を体験し, 対象の安楽について考察する。また, 看護活動の実際 (病棟の週間予定, 1日の看護活動など) について学び (DVD), 看護技術である「バイタルサインの測定」を実施する。
IV : 看護技術② (日常生活援助)	日常生活援助 (全身清拭, 足浴, 洗髪) を実施し, 療養生活を送る対象における援助の必要性について考察する。また, 患者役を体験することで患者の思いについて考察する。
V : 看護師の役割と責任	カンファレンスの目的や方法を理解し, 事例に対して効果的にカンファレンスを実践する。様々な現場で働く看護職の言葉や文献から, 看護師の役割と責任について考察する。

Ⅲ. 学内実習の展開

1. 学内実習の進め方

実習グループは, A～Eの5グループ (17～18名/1G) で編成し, 実習日に指定された実習項目Ⅰ～Ⅴを実施した (表3)。なお, 学内オリエンテーションを別日に設け, 実習の動機付けを行った。慣れない学修環境であることや, 授業との調整で日程が変則であることから, Moodle等を活用して学生自身が間違いなく日程を把握し, 履修することができるよう配慮した。

また, 5グループ編成ではあるものの, 実習に伴う感染のリスクを減らすため, 実習開始時間を時間差とし, 更衣室や休憩時の「密の回避」を徹底した。

表 3. 実習項目と実習の構成

実習日	曜日	実習グループ / 実習項目				
		A	B	C	D	E
第 1 日	月	I	II	III	IV	V
第 2 日	火	V	I	II	III	IV
第 3 日	水	IV	V	I	II	III
第 4 日	木	III	IV	V	I	II
第 5 日	金	II	III	IV	V	I

2. 項目 I～V の実際

1) 項目 I：コミュニケーション

「一般的なコミュニケーション」を身につけるために「自己紹介・他者紹介」を行った。また、「好感・信頼感を高めるコミュニケーション」について非言語表現を用いながらコミュニケーションを図り、コミュニケーション技術について意見交換を行った。

さらに、「専門職としてのコミュニケーション」では事例を用いてロールプレイングを実施し、コミュニケーションの実際を動画撮影し、その様子を振り返りながら意見交換し考察した。

2) 項目 II：療養環境

病院および病棟の「模擬オリエンテーション」を設定し、病院の構造と機能、各部門・多職種とのかかわりについてオリエンテーションで得た情報を共有し、疑問点について意見交換を行った。また、「模擬療養環境」を 3 場面設定し、各事例を通して療養環境の特徴や必要な環境調整・援助について考え、意見交換し、実際に療養環境を整えた。

3) 項目 III：看護技術①

安楽な援助として体動制限の体験を行った。仰臥位で 30 分臥床（体動不可）することによる臥床時の苦痛を体験し、観察者は必要だと考えた安楽の援助について考察した。また、バイタルサインの測定を実施し、療養生活を送る患者の観察の必要性について考察した。

4) 項目 IV：看護技術②

全員が看護師役、患者役となり、臥床している患者の全身清拭、端座位が可能な患者の足浴、ベッド上でのケリーパッドを用いた洗髪を実施した。実施後は意見交換を行い、実施した技術を振り返り、患者役の思いを知ることによって、患者にとって必要な日常生活援助について考察を深めた。

5) 項目 V：看護師の役割と責任

カンファレンスの意義と進め方について講義を行った後、模擬カンファレンスを実施した。DVD「看護実践能力向上シリーズ：看護のこころによりそう看護コミュニケーション」の事例「逸脱行為をする患者への対応」を用い、肝硬変で薬を服用しない、食後の安静を守らない患者について、どのように対応すればいいかということテーマとした。さらに、「ナース：ナイチンゲールが教えてくれたこと」を視聴し、看護師の役割と責任について考察を深めた。

IV. 学内実習における学生の意見

項目 I～V および基礎看護学実習 I 全体を通して学んだ学生の意見を表 4 に示す。意見については、今後の教育活動に活用すること、成績等には一切影響がない旨を口頭で説明した。

表4. 基礎看護学実習Ⅰを通して学んだこと (学生の感想より一部抜粋)

項目Ⅰ：コミュニケーション
<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーション能力を高める必要性に気づいた ・コミュニケーション技法を用いて共感する態度が大切だと学んだ ・状況に応じたコミュニケーションが重要 ・看護師の言葉一つひとつに責任があるため、しっかりと丁寧な言葉遣いを大切にしたい
項目Ⅱ：療養環境
<ul style="list-style-type: none"> ・療養生活を送る患者の環境を観察し、得られた情報から必要な援助を考えることができた ・自分では気づけなかったことがわかり、グループでの意見交換が有意義だった ・看護師が小さな変化に気づくことが患者にとって大切だとわかった ・病院内では多職種が関わっていることがわかった
項目Ⅲ・Ⅳ：看護技術①②
<ul style="list-style-type: none"> ・自分が患者役をすることによって、患者の気持ちをより理解することができた ・援助しながらも余裕を持って行動することが今後の課題だとわかった ・患者の安全と安楽に常に気を配らなければいけないことがわかった ・患者役と看護師役の両方を体験することで、留意点やより効率を考えることができた ・体動制限を経験することで、その苦痛と必要な援助がわかった ・事前学習と練習の大切さがわかった ・今の自分の技術の力量がわかり、今後どうしていくべきかを知ることができた
項目Ⅴ：看護師の役割と責任
<ul style="list-style-type: none"> ・看護師は患者や家族が辛いときに寄り添うことができ、人の永遠の旅立ちを見届けることができる素晴らしい仕事であると学んだ ・看護師は患者・家族に大きな影響を与えるため、責任が大きい ・大変な職種であることを実感するとともに、前向きに頑張ろうという気持ちになった ・患者の周りの環境に目を向け、気持ちに寄り添い心のケアをしていくことも重要だと学んだ ・自身の看護観をもった看護師になりたいと思った ・看護師の役割とは、患者がその本来の力を取り戻すために援助することだとわかった ・カンファレンスを通じて、自分では気が付かなかったことや自分とは違う見方を知ることができ、看護はチームだと思った
全体を通して
<ul style="list-style-type: none"> ・病院の実習に行けない悔しさはあるが、学内実習で色々なことを学べたことは、今後の実習に活かすことできる ・事前に目標や計画を立て、実習後に意見交換を行ったことで効率よく学べる環境だった ・患者に対する責任感や、患者を第一に考えた援助の必要性が理解できた ・意見交換で様々な学生と関わり、チームで取り組むことの大切さや、深く考えるための新鮮な発想や意見を吸収でき、良い刺激を受けた

V. 考察

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、2020年度の基礎看護学実習Ⅰはすべて学内実習にせざるを得ない状況であったが、臨地実習が学内実習になることで学修内容に乖離が生じないように構成した学内実習を行った。学生は臨地での実習ができないことに当初は落胆を感じていたと思われるが、学生の意見にもあるように学内で学修を深め、次回の実習に備える機会となったこと、前学期に十分学生間でのコミュニケーションをとる機会がなかったことや、看護技術の演習があまりできなかったことから、基礎看護学実習Ⅰは学内実習となったものの貴重な経験ができたととらえていた。実習全体を通して、自身の課題を見出すなど、多くの学びを得ていたことがわかる。

臨地での実習ができないことで患者の療養環境や看護実践のイメージがつきにくいと考え、DVDの視聴や模擬療養環境を設定した。これにより看護師の役割と責任、カンファレンスやコミュニケーション技法、患者の療養環境の調整などのイメージ化を図ることができたと考える。さらに、学生の学びの中に「患者の気持ちがあった」という記述が多く見られたことから、学内実習ならではの効果として、学生がロールプレイングを通して患者、看護師双方の気持ちを考えることができたと考える。

これらのことから、学内実習として実施した基礎看護学実習 I においては、療養している患者とのコミュニケーションや看護実践の体験はできなかったものの、実習目的・目標は概ね達成できたと考えられる。しかし、その一方で学内実習の実施時期が後学期に入ってからであったため、通常開講の授業と同時に進行し、実習に集中することは困難であった。実習内容も項目 I～V と盛りだくさんであったため、様々な体験はできたものの学びを深めるという点では物足りなさもあったと思われる。その点を考慮すると、実習項目の焦点を絞ることや模擬患者の設定を検討する必要性、実習項目の順序性と教育効果への影響、ICT (Information and Communication Technology: 情報通信技術) の活用など、様々な課題も見出すことができた。

新型コロナウイルスの影響は初めての病院実習となる学生の重要な学修機会に多大なる影響をもたらした。しかし考え方や見方を変えれば、その環境の中で「何を学ぶのか」「できないことをできるに変える」考え方など、困難な状況になったからこそ気づくことができる機会となったのではないかと考える。また、2022 年度に予定されているカリキュラム改正ともあいまって、新たな看護基礎教育の基盤について考える貴重な機会となり得たとも考える。今後も学生を受け入れる病院の困難は計り知れないが、看護教育を止めるわけにはいかない。2020 年度の基礎看護学実習 I の実習内容をより臨地に近い学修成果となるよう、継続して振り返り、効果的な学内実習について再考していく機会であると考えます。

VI. 今後の課題

今なお混乱を極める新型コロナウイルスの影響は、いつ収束するかわからない。新型コロナウイルス感染症に対応する医療機関の状況によっては、今後の臨地実習もこれまで同様に実施できるとは限らない状況である。臨地実習を学内実習に変更せざるを得ない状況が生じて、可能な限り臨地実習に相当する学修内容が確保できるよう、実習施設との連携も含め臨地実習の在り方について再考していく機会である。そのためには、様々な教育ツールを可能な範囲で有効活用していくことも検討する必要がある。

2020 年度は、模索しながらも臨地と乖離のない学内実習を構成し基礎看護学実習 I を実施した。この実習における学生の声を活かし、どのような困難な状況下であっても、教育内容の質が担保できる実習内容を検討していくことが今後の課題であると考えます。

文 献

文部科学省 (2017). 看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標」～ (看護学教育の在り方に関する検討会).

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf, 2020-12-24.

阿部テル子, 工藤千賀子, 渡部菜穂子, 後藤英優子 (2017). 基礎看護学実習における学生の対受持患者コミュニケーション展開—学生と患者の言語的・非言語的表現とその受け止め方の分析から—. 弘前学院大学看護紀要, 12, 13-25.

今井 恵, 松永早苗, 千田美紀子, 井上美代江, 辻 俊子, 井下照代, 上野範子, 森下妙子 (2015). 基礎看護学実習 I における学生の学び—レポートの分析—. 聖泉看護学研究, 4, 39-46.